

## なぎなた弁護士の道

会員 山下 洋美



「昔、なぎなたをやっていました」と言うと、大抵、驚かれる。「中学校と高校時代は、部活でやっていました」と言うと「なぎなた部があるんだ」とさらに驚かれる。次に「どこの学校？」と聞かれ、「会津若松（出身）です」と答えると「なるほどね」と妙に納得される。私の中で恒例のやり取りとなっている。

本寄稿を機に、なぎなたについてウィキペディアで調べてみたところ、武器の「薙刀」と武道の「なぎなた」のページが分けて書いてあった（なぎなたは、武道そのものとそこで使われる武器との呼称が同じなのである）。「薙刀」はもともと男性も使用する武器だったが、槍にとって変わられ、その後、鉄砲の伝来により、長柄の武器そのものが衰退し、僧侶や婦女子の用いる武器となっていった。実戦武器としては廃れていったものの、江戸時代には古武道としての地位を確立し、今では、主に女性のたしなむ武道の「なぎなた」となった、ということらしい。戊辰戦争での娘子軍（隊）の奮闘については小さい頃から聞かされており、試合会場にはいつも「燃えよ！娘子軍！」と書かれた横断幕がかけられていた記憶がある。

小学生の頃、たまたま家のポストに入っていた教室のチラシを見て興味を持ったことがきっかけで始めた。毎回、2メートルを超えるなぎなたを片手に持ちながら自転車に乗って練習会場まで移動し（おそらく違法である）、練習場所が無いと裸足のまま外で練習したりしながら（足の裏はいつもマメだらけ）、高校卒業までほぼ毎日稽古していた。ほとんどやら

なくなってしまった今でも、無意識に構えの姿勢をとってみたり、話題の小説に「薙刀」の文字が出ているだけでなんだか嬉しかったり…なぎなたはすっかり私の細胞に染み込んでしまっている。

そんななぎなたの経験が、弁護士としての私を支えていることは確かである。

練習を毎日重ねている中で、ふと鏡に映った自分の動きが、前と変わって綺麗に見えていくことが嬉しく、地道な日々の積み重ねの大切さを実感していた。特に、演技競技については、歳に相応した美しさが表現されることも魅力的だった。若いうちは、練習すればするほど形は綺麗に、勢い良くなっていくが、一方で、80歳を過ぎた師範の動きなどは、無駄な力が抜けた上での力強さがあり、とても優雅に見えるのだ。どこまでも積み重ねが大切だと日々実感していた。今でも、その姿勢は大切にしている。

また、試合競技では、相手の動きを捉えながら機会を伺い、瞬時にここだと判断して打突に向かう、緊張の中での判断力も必要だった。瞬発力、判断力は、まさに仕事でも必要な力である。その他にもなぎなたから教わった事柄は数知れない。また、いつかなぎなたを…再開するかは未定である。

大学卒業後、複数の仕事で回り道し、ようやくスタートを切れてよかったと思っていたら、あっという間に過ぎてしまった1年目であった。2年目以降も、日々の積み重ねを大切にしながら仕事に励んでいきたいと思う。何年か先にふと鏡に映った自分の姿を見たとき、弁護士として、今より美しく無駄のない構えができていることを想い描きながら。